

9月14日 礼拝レジュメ

「祈りに答えてくださる主」使徒の働き4章25節～31節

25, 26 節は、詩篇2篇1節の引用→29節から始まる主への嘆願の神学的根拠。

使徒たちは、この詩篇2篇がヘロデとピラト、つまり異邦人とイスラエルが一つとなってイエスを十字架につけたことにより成就したと考えた。28節によると、神があらかじめご計画されたことを彼らが行ったにすぎない。

そしてメシアであるイエス様に敵対する者の中には、異邦人とともに神の民であるユダヤ人も含まれていた。

27節でイエス様のことを「あなたの聖なるしもべイエス」と呼んでいる。

- ① イエス様はご自身で「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」(マタイ20:28)と言われた。まさにイエス様は仕えるために来られ、それは贖いの代価を払うために十字架にかかることを意味していた。それこそが、まさに聖なるしもべとしての歩みであり、聖なるしもべとしてのイエス様を遣わされたことが神のみこころであり、そのようにお定めになっていたのですが、決して人は聖なるしもべとしてのイエスを受け入れなかったことで、詩篇2篇でダビデを通して語られたことが、イエスにあって実現し、そして今度はイエスの弟子であった使徒たちにおいて実現した、前回も申しましたように、人の心の頑なさや罪のゆえに、ずっと同じことが繰り返されている。

そして、ここで彼らは祈りをもって神に求めているのは、まずは「彼らの脅かしをご覧になって」とは、すべてを知ってくださり、そこに主ご自身の

正義を表してくださいということ。そして、信仰をもってすべてを神にゆだねた。

「しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください」31節「一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出した。」と、祈りが実現していることが分かる。議会は18節で、イエスの名によって語ることも教えることもいっさいしてはならないと命じた。しかし19、20節で「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」と言ったが、このような迫害が、これからも続くのではないかということは容易に想像ができますし、これからどんな迫害があり、民の指導者たち、長老たち、律法学者たちは、どんな嫌がらせをしていくか分からない。そのような脅かしに負けず、人に聞き従うよりも神に聞き従い、自分たちの見たこと、聞いたことを話し続けるために、彼らは主に大胆さを求め、その祈りの結果、彼らはみことばを大胆に語り始めた。そして、その大胆さは、一同が聖霊に満たされたことによる。

次が「御手を伸ばし、あなたの聖なるしもべイエスの名によって、いやしとするしと不思議を行わせてください」使徒たちは、生まれつき足の不自由な人をいやすようなみわざを神はなして下さること、そのことにより人々がただひたすら神様の御力を知るようになること、そして神の栄光が現れ、神がほめたたえられるようになることを願ってこのことを祈った。

そして、彼らの祈りを通して三つのしるしが現れました。一つが「その集まっていた場所が揺れ動いたということ、そして二つ目が先ほど話しましたように一同が聖霊に満たされ、三つ目が大胆にみことばを語り始めたことです。これらは明らかに神様が彼らの祈りを聞かれたことの証し。

彼らは、すべてのことにおける主なる神の主権、みこころによる支配を認めていた。彼らは自分たちがしもべだということを認識し、どんな中でもすべてを主なる神におゆだねして、ただ自分たちの努め、なすべきことを果たすことができるようにと祈った。

彼らの歩みはまさに聖なるしもべイエスが歩まれた道と同じ。特に神のみこころに従う中で、時の指導者たちに憎まれ、迫害されるのは全く同じです。ですから、キリスト者として反対されたり、迫害されることは決して驚くことではなく、キリストの弟子としてあるべき姿ではないか。

心揺さぶられる時に、私たちは心を一つにして、神に向かって声をあげる兄弟姉妹たちがいて、恵みによって私たちはこのところに集められている。

私たちが心を一つにして、神に向かって声をあげる時に、神は祈りにこたえてくださり、主の主権とみこころにすべてをゆだねて、確信をもってともに歩いていけるのが、教会の歩み。